

令和元年5月30日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03085

研究課題名(和文) 青少年の危険ドラッグを含む薬物乱用の実態とライフスタイルに関するモニタリング研究

研究課題名(英文) A monitoring study on drug abuse including new synthetic drugs and lifestyles among youth in Japan

研究代表者

三好 美浩 (MIYOSHI, Yoshihiro)

岐阜大学・医学部・准教授

研究者番号：00452508

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、薬物乱用とライフスタイルとの関連性の観点から、18 - 22歳の青少年における健康なライフスタイルのあり方を評価することを目的とした。方法は、関東地域の18 - 22歳の男女個人を対象に、住民基本台帳に基づいた層別二段階無作為抽出法による調査を2016年と2018年に2回実施した。無記名の自記式質問紙法により、2016年は標本1015人(回収率56.4%)、2018年は標本933人(回収率54.9%)を得た。1) 喫煙と飲酒の生涯、1年、30日経験率、危険ドラッグ、有機溶剤、大麻、覚せい剤、MDMAの生涯及び1年経験率、2) 飲酒理由の割合と順位、3) アルコール飲料嗜好の割合と順位が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、日本人人口の約3分の1が住む関東地域の18 - 22歳の青少年における薬物乱用調査により、薬物乱用経験の実態把握と、薬物乱用と属性及びライフスタイルとの因果推論を行い、薬物乱用防止対策のために高い妥当性及び信頼性をもつ基礎情報を提供することにある。

社会的意義として、高校卒業後から社会人への移行期における薬物乱用に関する情報を提供することと、法定喫煙及び飲酒年齢である20歳を跨ぐ18 - 22歳の青少年に焦点を当てていることのため、青少年に対する薬物乱用の1次予防と健康なライフスタイルの実現に貢献できる。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to evaluate forms of healthy lifestyles for Japanese youth ages 18 to 22 from the viewpoint of the association between substance use and lifestyle. This study conducted two surveys of Japanese youth in 2016 and 2018, by two-stage stratified random sampling based on basic resident registers. The 2016 and 2018 surveys obtained data from 1,015 respondents (response rate: 56.4%) and 933 respondents (response rate: 54.9%) respectively among randomly selected youth ages 18 to 22 living in the Kanto region of Japan and who completed a self-administered questionnaire. Responses indicated (1) the prevalence of substance use (cigarettes, alcoholic beverages, new synthetic drugs, inhalants, marijuana/hashish, amphetamine-type stimulants, and MDMA (ecstasy)) over one's lifetime, during the past year, and during the past 30 days, (2) the percentage and ranking of reasons for alcohol consumption, and (3) the percentage and ranking of alcoholic beverage preferences.

研究分野：社会疫学

キーワード：喫煙・飲酒・薬物乱用 社会疫学 モニタリング調査 ライフスタイル 青少年問題 危険ドラッグ  
ジェンダー 統計的標本調査

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

薬物乱用は、長きに渡り国際問題の主要なテーマの一つである。特に、青少年においては、薬物乱用の実態把握と、その対策として薬物に手を染めさせない1次予防の重要性が極めて高い。日本では、2013年8月に第四次薬物乱用防止5か年戦略が策定され、その5つの目標の一つに、「青少年、家庭及び地域社会に対する啓発強化と規範意識向上による薬物乱用未然防止の推進」が謳われた。2014年7月に、規制が追付いていない薬物の総称が「危険ドラッグ」に改称されたが、規制の穴を突くように危険ドラッグの乱用による複数の交通事故が起きた。その他にも危険ドラッグ中毒による救急搬送の増加も指摘され、青少年に限らず、日本社会全体に危険ドラッグの蔓延が危惧された。

本研究では、「薬物乱用」の用語を、喫煙や飲酒、さらにはシンナー(有機溶剤)、大麻、覚せい剤等の乱用から、危険ドラッグや合法薬物である医薬品までを含む広義の意味に用いる。米欧及び日本における青少年の薬物乱用調査には、以下の取り組みがある。

- 米国では、1975年にミシガン大学社会調査研究所のJohnston博士らの研究班が、全国の12年生を対象にMonitoring the Future study(以下「MTF」という。)を開始した。その後、12年生の追跡調査、8年生と10年生の全国調査など、プロジェクトを拡大し現在に至る<sup>1)</sup>。
- 欧州では、MTFの影響を受け、1995年に欧州26か国で第1回European School Survey Project on Alcohol and Other Drugs(以下「ESPAD」という。)が開始された<sup>2)</sup>。ESPADは、これまで1995年、1999年、2003年、2007年、2011年に計5回実施された。
- 日本では、国立精神・神経センター精神保健研究所(現国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)の福井進先生と和田清博士らの研究班が、1996年に全国中学生を対象とした「薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査」を開始し、その後隔年毎の継続した調査を行っている<sup>3)</sup>。
- 勝野眞吾博士を代表とする研究班は、全国高校生を対象とした「高校生の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査(英語名: Japanese School Survey Project on Alcohol and Other Drugs)」(以下「JSPAD」という。)を、2004年、2006年、2009年に計3回実施した<sup>4)</sup>。さらに、同研究班は、JSPAD調査に加え、関東地域の18-22歳の日本人を対象とした「青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査(英語名: Japanese Youth Survey Project on Alcohol and Other Drugs)」(以下「JYPAD」という。)を2007年に実施した<sup>5)</sup>。

本研究代表者は、JSPAD及びJYPADに参画し、さらに2011年度に科学研究費補助金(研究活動スタート支援)を受け、2012年に高校2年生のライフスタイルに焦点を当てた「青少年の健康なライフスタイルに関する調査」を実施した。これらの研究から、以下の成果が得られた。

- 生徒及び学生のアルバイト時間が長くなると、薬物乱用の経験率が高くなるという正の関連性を明らかにした。そして、アルバイト時間は、他のライフスタイルに比べて、薬物乱用経験率との関連性が高いこと。
- 高校生のアルバイト時間は、生活時間配分の割り当てにおいて、クラブ活動への参加とトレード・オフの関連にあること。
- 運動部の活動に積極的に参加している生徒は、薬物乱用との関わりが少ないこと。
- 朝食を食べない青少年ほど、喫煙の経験率は高くなること。
- 18-22歳の青少年では、規則正しい生活を送っているほど、喫煙及び飲酒の経験率が低くなること。

このように、青年期にある種のライフスタイルを身に着けることが、薬物乱用の1次予防にとって効果的であることが示唆されるので、ライフスタイルと薬物乱用との関連性をより詳細に解明する必要性は高い。そこで、18-22歳の青少年におけるライフスタイルと薬物乱用との関連性の観点から、青少年のライフスタイルを評価するという本研究の着想に至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、ライフスタイルと薬物乱用との関連性の観点から、18-22歳の青少年における健康なライフスタイルのあり方を評価することを目的として取り組む。本研究は、研究期間内に以下の3点を明らかにすることを目指す。

2016年及び2018年の18-22歳の青少年における薬物乱用経験率を示すこと。

18-22歳の青少年におけるライフスタイルと薬物乱用との関連性を解明すること。

ライフスタイルと薬物乱用との関連における、18-22歳の大学生と社会人との相違を解明し、健康なライフスタイルのあり方を評価すること。

### 3. 研究の方法

#### (1)調査概要

本研究は、2015(平成27)年度から2018(平成30)年度までの4年計画で、ライフスタイルと薬物乱用との関連性の観点から、青少年の健康なライフスタイルに関するモニタリング調査研究に取り組んだ。調査対象は、関東地域(東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県、群馬県、茨城県、栃木県)に住む18-22歳の日本人男女個人とし、住民基本台帳に基づき、層別二段階無作為抽出法を適用した個人抽出による標本調査を、2016年と2018年に2回実施した。調査方法は、無記名の自記式質問紙調査法を適用し、訪問配付法により質問紙を配付し、訪問及び

郵送回収法により質問紙を回収した。その後、回収した質問紙についてデータ入力し、データクリーニングを経て、各調査データを確定した。これらの調査データに基づき青少年の健康的なライフスタイルのあり方を評価している。モニタリング調査における比較可能性を高めるため、2回の調査に可能な限り共通の調査法と同一の質問紙を適用した。ただし、2016年の第1回調査と2018年の第2回調査との間で、計画標本、抽出地点数、有効回答標本、回収率が異なるので、それぞれの概要について以下に整理する。

2016年3～4月に実査が行われた第1回調査は、18-22歳の男女個人について、抽出地点数90地点から計画標本1,800人を選出した。その計画標本の内1,022人から質問紙が回収され、最終的に有効回答標本1,015人(回収率56.4%)が確定された。

2018年3～4月に実査が行われた第2回調査は、18-22歳の男女個人について、抽出地点数85地点から計画標本1,700人を選出した。その計画標本の内937人から質問紙が回収され、最終的に有効回答標本933人(回収率54.9%)が確定された。

なお、本研究を実施するにあたり、倫理的配慮として、岐阜大学大学院医学研究等倫理審査委員会の承認を得た(29-279「青少年の薬物乱用の実態とライフスタイルに関するモニタリング研究」)。また、本研究で実施した2回の調査は、2007年JYPADの調査法を基盤とし、改めて調査方法を整理した。そのため、2016年調査を第2回JYPADに、2018年調査を第3回JYPADに位置づけている。

## (2)変数及び質問項目

本研究において鍵となる変数は、各薬物乱用経験である。すなわち、第1に、喫煙及び飲酒については、生涯に一度でも使用したことがあるかを表す生涯経験、過去1年間に使用したことがあるかを表す1年経験、過去30日(1か月)間に使用したことがあるかを表す30日経験を作成した。第2に、危険ドラッグ、有機溶剤、大麻、覚せい剤、MDMAについては、生涯経験と1年経験を作成した。これらの薬物乱用経験の変数は、質問紙で用いられた薬物乱用経験に関する質問項目の回答カテゴリから、「経験あり」と「それ以外(経験なし・欠損値等)」の2カテゴリに再コーディングされた。ただし、一部再コーディングを要していないものを含む。

質問紙は、全体で100問強からなる質問項目で構成された。質問項目の内容として、性別、年齢、所属といった属性に関する項目、起床時間、就寝時間、朝食、睡眠、運動・スポーツ、規則正しい生活、健康状態、その他の行動、人間関係といったライフスタイルに関する項目や、各薬物乱用経験に直接的に関連する項目が含まれた。

## (3)分析方法

喫煙及び飲酒の生涯、1年、30日経験率、危険ドラッグ、有機溶剤、大麻、覚せい剤、MDMAの生涯及び1年経験率については、標本全体、男女別、年齢別による単純経験率を算出した。同様に、性別、年齢、ライフスタイル変数、その他の質問項目についても、標本全体、男女別、年齢別による回答の頻度及び割合を算出した。また、各薬物乱用経験、飲酒理由、アルコール飲料嗜好と性別、年齢、所属との関連性は、クロス分析及びカイ2乗検定により分析された。

## 4. 研究成果

### (1) 喫煙経験率

2016年JYPADでは、18-22歳の青少年における喫煙の生涯経験率は、全体22.6%、男性30.3%、女性15.6%であった。同様に、喫煙の1年経験率は、全体17.2%、男性24.3%、女性11.0%であり、喫煙の30日経験率は、全体11.7%、男性17.6%、女性6.5%であった。喫煙の生涯、1年、30日経験率の結果は、先行研究と同様に、すべて女性よりも男性の経験率の方が高かった。

2018年JYPADでは、18-22歳の青少年における喫煙の生涯経験率は、全体23.4%、男性31.3%、女性14.3%であった。同様に、喫煙の1年経験率は、全体19.3%、男性26.3%、女性11.3%であり、喫煙の30日経験率は、全体12.9%、男性17.9%、女性7.1%であった。

2018年の喫煙経験率の結果は、2016年の喫煙経験率と比較すると、女性における喫煙の生涯経験率を除いてやや増加傾向はみられるが、全体、男性、女性のすべての喫煙経験率について統計的に有意となるほどの調査年間の違いはなかった。また、女性よりも男性の喫煙経験率が高い傾向は、2回の調査において共通していた。

### (2) 飲酒経験率

2016年JYPADでは、18-22歳の青少年における飲酒の生涯経験率は、全体78.8%、男性79.1%、女性78.6%であった。同様に、飲酒の1年経験率は、全体74.2%、男性75.9%、女性72.6%であり、飲酒の30日経験率は、全体56.4%、男性59.6%、女性53.4%であった。

2018年JYPADでは、18-22歳の青少年における飲酒の生涯経験率は、全体75.9%、男性74.9%、女性77.0%であった。同様に、飲酒の1年経験率は、全体72.9%、男性71.9%、女性74.0%であり、飲酒の30日経験率は、全体56.2%、男性54.8%、女性57.7%であった。

2018年の飲酒経験率の結果は、2016年の飲酒経験率と比較すると、女性における飲酒の1年及び30日経験率を除いて減少傾向はみられるが、全体、男性、女性のすべての飲酒経験率について統計的に有意となるほどの調査年間の変化はなかった。2016年JYPADでは、男女におけ

る飲酒の生涯、1年、30日経験率を単純に比較すると、女性より男性の経験率の方が高かったが、2018年JYPADでは、飲酒の生涯、1年、30日経験率すべてについて、男性より女性の経験率の方が高いことが確認された。加えて、年齢による飲酒経験率の変化は、日本の法定飲酒年齢である20歳の前後で、極端な増加が確認された。

### (3) その他の薬物乱用経験率

2016年JYPADでは、18-22歳の青少年における危険ドラッグの生涯経験率は、全体0.6%であった。危険ドラッグの1年経験率は、全体における経験者はいなかった。その他の薬物乱用経験率において経験者がいたのは、有機溶剤の生涯経験率が全体0.5%、有機溶剤の1年経験率が全体0.1%、大麻の生涯経験率が全体0.5%であった。

2018年JYPADでは、18-22歳の青少年における危険ドラッグの生涯経験率は全体0.5%であり、危険ドラッグの1年経験率は全体0.3%であった。その他の薬物乱用経験率において経験者が確認できたのは、有機溶剤の生涯経験率が全体0.1%、有機溶剤の1年経験率が全体0.1%、大麻の生涯経験率が全体0.1%、覚せい剤の生涯経験率が全体0.1%、覚せい剤の1年経験率が全体0.1%、MDMAの生涯経験率が全体0.2%であった。

2018年の喫煙及び飲酒以外の薬物乱用経験率の結果は、2016年の結果と比較すると、割合水準では若干の変化はみられるが、全体における大麻の生涯経験だけが有意な調査年間の違いがみられ、2016年よりも2018年の経験率が低くなった。しかしながら、それ以外の全体、男性、女性の薬物乱用経験率について統計的に有意となるほどの調査年間の違いはなかった。

### (4) 飲酒理由

2016年JYPADでは、18-22歳の青少年全体における飲酒理由の割合は、「お酒を飲まない」を除いて、高い順に「友だちと楽しい時間を過ごすため」(55.7%)、「美味しいから」(29.1%)、「自分が好きな集団(仲間や家族)に合わせるため」(23.3%)、「良い気持ちになるため・ハイな気分になるため」(17.6%)、「リラックスするため・緊張を解くため」(16.8%)、「試すため・お酒がどのようなものかを知りたいから」(13.5%)、「眠るため」(5.8%)、「自分自身の問題や悩み事から逃れるため」(5.2%)、「より深い洞察や理解を得るため」(3.5%)、「怒りや欲求不満のため」(2.6%)、「退屈なため・何もすることがないから」(2.0%)、「その日をやり過ごすため」(1.6%)、「病みつきになっているため・飲まずにはいられないから」(0.6%)であった。上位6位までの飲酒理由の順位は、男女それぞれにおいても同一であった。ただし、割合水準では、「良い気持ちになるため・ハイな気分になるため」と「より深い洞察や理解を得るため」は、共に女性より男性の方が有意に高かった。加えて、飲酒の生涯、1年、30日経験者を選出した飲酒理由の順位すべてにおいて、青少年全体における第1位から第6位までと同一の飲酒理由が選ばれた。また、年齢による飲酒理由割合の変化が、(a)20歳までに著しく割合は高くなり、20歳以降は高い割合に高止まりするもの、(b)年齢の上昇に伴い一度割合は高くなるが、ピークを過ぎると割合が低下するもの、(c)20歳までに著しく割合が高くなり、さらに20歳以降も緩やかな割合の上昇を続けるもの、という3個の特徴に整理された。

### (5) アルコール飲料の選好

2016年JYPADでは、18-22歳の青少年全体が好むアルコール飲料は、高い割合の順に「カクテル」(35.6%)、「チューハイ」(33.7%)、「梅酒・果実酒」(32.5%)、「ビール・発泡酒」(24.5%)、「日本酒」(11.5%)、「ウイスキー」(9.4%)、「ワイン」(9.3%)、「焼酎」(7.0%)であった。男女別では、男性が好むアルコール飲料は、高い順に、「ビール・発泡酒」、「チューハイ」、「カクテル」、「梅酒・果実酒」、「日本酒」、「ウイスキー」、「ワイン」、「焼酎」であった。それに対して、女性が好むアルコール飲料は、高い順に、「カクテル」、「梅酒・果実酒」、「チューハイ」、「ビール・発泡酒」、「ワイン」、「日本酒」、「焼酎」、「ウイスキー」であった。

「ビール・発泡酒」、「日本酒」、「ウイスキー」、「カクテル」、「チューハイ」、「梅酒・果実酒」について、アルコール飲料の選好における男女間の統計的な有意な違いがみられた。その内、「ビール・発泡酒」、「日本酒」、「ウイスキー」では、女性よりも男性の割合が高く、「カクテル」、「梅酒・果実酒」、「チューハイ」では、男性よりも女性の割合が高かった。

次に、年齢別による18-22歳の青少年が好むアルコール飲料は、「その他」を除くすべてのアルコール飲料について、18歳よりも19歳、19歳よりも20歳における割合がより高くなった。すなわち、18歳から20歳までは、明らかな単調増加傾向がみられ、日本の法定飲酒年齢である20歳以上の規定が、アルコール飲料選好の割合にも影響を与えていることが示唆された。しかしながら、アルコール飲料選好の割合が、20歳以降でも単調に増加するかというと、ほとんどのアルコール飲料においてそのような結果にはならなかった。18歳から22歳まで単調に増加しているアルコール飲料選好の割合は、「チューハイ」と「ワイン」だけである。しかも、これら2種類のアルコール飲料であっても、20歳以上の割合はそれほど大きく増加しなかった。

さらに、男女それぞれについて飲酒経験者を選出し、アルコール飲料の選好をまとめた。その結果、飲酒の生涯及び1年経験者では、男性は「梅酒・果実酒」よりも「カクテル」の割合が高く、「焼酎」よりも「ワイン」の割合が高かったのに対して、女性は「ウイスキー」よりも「焼酎」の割合が高かった。また、飲酒の生涯、1年、30日経験者における男女の違いは、6種類のアルコール飲料に共通に示された。すなわち、男性は、「ビール・発泡酒」、「日本酒」

「ウイスキー」をより好み、女性は、「カクテル」、「梅酒・果実酒」、「チューハイ」をより好んだ。結論として、本研究は、飲酒の生涯、1年、30日経験者の違いに関わらず、18-22歳の青少年において、「ビール・発泡酒」、「日本酒」、「ウイスキー」、「カクテル」、「梅酒・果実酒」、「チューハイ」の選好に顕著な男女の違いを発見した。

今後も、2016年及び2018年JYPADに基づき、引き続き研究成果を発表していく。

#### <引用文献>

- 1) Johnston LD, O' Malley PM, Bachman JG et al. Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975-2011: Volume I, Secondary school students. Ann Arbor: Institute for Social Research, The University of Michigan, 2012
- 2) Hibell B, Guttormsson U, Ahlström S et al. The 2011 ESPAD Report: Substance Use Among Students in 36 European Countries. Stockholm: CAN, 2012
- 3) 和田 清, 水野菜津美, 嶋根卓也ほか. 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2012年). 平成24年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)研究報告書「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究」(研究代表者: 和田清), 2013
- 4) 勝野眞吾, 三好美浩, 和田 清ほか. 高校生の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査2009報告書, 岐阜薬科大学, 2012
- 5) 勝野眞吾, 三好美浩, 西岡伸紀ほか. 青少年の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査2007: 関東地域における18-22歳対象の抽出調査報告書, 兵庫教育大学教育・社会調査研究センター, 2008

#### 5. 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計8件)

Y. Miyoshi, S. Katsuno, N. Nishioka, Gender differences in the association between alcohol consumption and alcoholic beverage preference among Japanese youth ages 18 to 22, Alcoholism: Clinical & Experimental Research, 査読有, Vol.42, 2018, p.39

三好 美浩, 飲酒経験における18歳から22歳の大学生と社会人との差異, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.53(No.4), 2018, p.171

大塚 朋以, 三好 美浩, 若年労働者における目標志向性と生活習慣との関連, 東海公衆衛生雑誌, 査読有, Vol.6, 2018, p.43

三好 美浩, 18歳から22歳の日本の若者における飲酒理由に関する確認的研究 - 2016年JYPAD調査からの結果 -, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.52(No.6), 2017, pp.264 - 286

三好 美浩, 西岡 伸紀, 2016年の全体, 性別, 年齢別による18歳から22歳の若者における飲酒経験率, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.52(No.4), 2017, p.234

三好 美浩, 勝野 眞吾, 西岡 伸紀, 和田 清, 全体, 性別, 学年別からみた高校生における飲酒の理由 - 探索的研究 -, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.51(No.5), 2016, pp.302 - 322

三好 美浩, 勝野 眞吾, 西岡 伸紀, 和田 清, 飲酒とライフスタイルとの関連における調整変数としての性別, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.51(No.4), 2016, p.165

三好 美浩, 勝野 眞吾, 若杉 里実, 西岡 伸紀, 和田 清, 全体, 性別, 学年別からみた高校生の飲酒とその理由, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 査読有, Vol.50(No.4), 2015, p.243

##### [学会発表](計12件)

Y. Miyoshi, S. Katsuno, N. Nishioka, Gender differences in the association between alcohol consumption and alcoholic beverage preference among Japanese youth ages 18 to 22, 19th World Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA 2018), 2018

三好 美浩, 飲酒経験における18歳から22歳の大学生と社会人との差異, 第53回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 2018

三好 美浩, 日本の若者における喫煙行動の男女差 - 2016年JYPAD調査の結果 -, 日本社会心理学会第59回大会, 2018

大塚 朋以, 三好 美浩, 若年労働者における目標志向性と生活習慣との関連, 第64回東海公衆衛生学会学術大会, 2018

三好 美浩, 西岡 伸紀, 2016年の全体, 性別, 年齢別による18歳から22歳の若者における飲酒経験率, 第52回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 2017

三好 美浩, 日本の若者における喫煙行動と父母及び友だちの喫煙, 日本社会心理学会第58回大会, 2017

三好 美浩, 若者に好まれるアルコール飲料の種類とその背景, 日本人間工学会第25回システム大会, 2017

三好 美浩, 喫煙とライフスタイルとの関連における調整変数としての性別, 日本社会心理

学会第 57 回大会、2016

三好 美浩、勝野 眞吾、西岡 伸紀、和田 清、飲酒とライフスタイルとの関連における調整変数としての性別、第 51 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会、2016

三好 美浩、勝野 眞吾、若杉 里実、西岡 伸紀、和田 清、全体、性別、学年別からみた高校生の飲酒とその理由、第 50 回日本アルコール・薬物医学会学術総会、2015

三好 美浩、勝野 眞吾、西岡 伸紀、和田 清、高校生の危険ドラッグに対する認識及びリスク認知、第 62 回日本学校保健学会、2015

三好 美浩、若杉 里実、高校生の喫煙及び飲酒行動に関連する主観的経験、日本社会心理学会第 56 回大会、2015

〔図書〕(計 2 件)

三好 美浩、勝野 眞吾、西岡 伸紀、和田 清、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2018 報告書 - 関東地域における 18-22 歳対象の標本調査 -、岐阜大学、2018、pp.1 - 105

三好 美浩、勝野 眞吾、西岡 伸紀、若杉 里実、和田 清、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2016 報告書 - 関東地域における 18-22 歳対象の標本調査 -、岐阜大学、2016、pp.1 - 103

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：勝野 眞吾

ローマ字氏名：( KATSUNO, shingo )

所属研究機関名：岐阜薬科大学

部局名：薬学部

職名：学長

研究者番号 ( 8 桁 ) : 70098523

研究分担者氏名：西岡 伸紀

ローマ字氏名：( NISHIOKA, nobuki )

所属研究機関名：兵庫教育大学

部局名：大学院学校教育研究科

職名：教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 90198432

研究分担者氏名：若杉 里実

ローマ字氏名：( WAKASUGI, satomi )

所属研究機関名：愛知医科大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 00315920

(2)研究協力者

研究協力者氏名：和田 清

ローマ字氏名：( WADA, kiyoshi )

研究協力者氏名：大塚 朋以

ローマ字氏名：( OTSUKA, tomoi )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。